

# フランス革命期における学問分野の再編 —タレーラン案からコンドルセ案への移行—

平井 正人

## 1. 序論

古代以来、学問はさまざまな方法で分類されてきた<sup>1</sup>。学問分類史上、はじめて体系的に学問の分類を行ったのはアリストテレスである。万学の祖と呼ばれるように、アリストテレスは自身の著作の一つひとつによって学問分野 (discipline) を確立し、それら著作の全体によって学問分類 (classification of sciences) を行った。同時にアリストテレスは、『ニコマコス倫理学』と『形而上学』において、理論的学問、実践的学問、生産的技芸という三分法を提示した<sup>2</sup>。ローマ時代にはウァロ (Varro, 116-27 B.C.) が『学問論』 (*Disciplinarum libri*) の中で学問分類を論じ、後の自由七科 (Artes liberales) の基礎を作った<sup>3</sup>。

中世には、ボエティウス (Boethius, 480?-524) の『三位一体論』 (*De trinitate*) やカッシオドルス (Cassiodorus, 490-585) の『教育方法論』 (*Institutiones Divinarum et Saecularium Litterarum*)、セビリアのイシドルス (Isidore of Seville, 560?-636) の『語源論』 (*Etymologiae*)、サン・ヴィクトルのフーゴー (Hugh of St. Victor) の『学習論』 (*Didascalicon*)、12 世紀ルネサンスにおいては、キルウォードビー (Kilwardby, ?-1279) の『学問起源論』 (*De ortu scientiarum*) の中で学問分類が論じられた。

近代になると、フランシス・ベーコン (Francis Bacon, 1561-1626) が『学問の進歩』 (*The Advancement of Learning*) において、三つの心的能力 (記憶、想像力、理性) を基礎として学問の全体像を描こうとした。ベーコンの後、学問分類は百科事典の中でも行われるようになった。チェンバーズ (Chambers, 1680?-1740) の『サイクロペディア』 (*Cyclopaedia*) や、ディドロ (Diderot, 1713-1784) とダランベール (d'Alembert, 1717-1783) の『百科全書』 (*Encyclopédie*) には学問分類の図表が収められていた<sup>4</sup>。ただし、チェンバーズが独自の学問分類を採用したの

に対して、ディドロはベーコンの心的能力に基づく学問分類を範とした<sup>5</sup>。その後、19世紀にさまざまな論者によって、さまざまな学問分類論が提示されることになるが、20世紀になると学問分類にかんする議論は下火となっていった<sup>6</sup>。

本稿の目的は、フランス革命期において学問分類論が関係する議論が公教育論の中で展開されていた事実を指摘すると同時に、その歴史的意義を検討することにある。これまでの学問分類史では、18世紀の『百科全書』から19世紀のコントやアンペールに議論が飛んでしまっていた。しかし、実際はフランス革命期にも学問分類にかかわる出来事が起こっていたのである。バステュー陥落後、革命議会はそれまでの教育体制をことごとく廃止することを決定した。その結果、新しい公教育制度を早急に確立することが求められた。今日では、「あるべき公教育とはいかなるものか」についてそのときなされた議論が、革命期の公教育論と呼ばれている<sup>7</sup>。そこでは教育だけでなく、科学のあり方も議論されていた<sup>8</sup>。そして議論が移り行く中で、学問分野の分け方にかんする見解の転換も起こっていた。

本稿では、革命議会上に提出された二つの公教育論を一次史料として、その中で学問分類がどのように議論されているかが検討される。公教育論のひとつは、1791年9月10日から3日間にわたり憲法制定国民議会でタレーラン(Talleyrand, 1754-1838)が報告したもので、「1791年9月10日、11日、19日に国民議会で憲法委員会の名において行われた公教育にかんする報告」(以下、タレーラン案)と題されている。もうひとつは、1792年4月20日から21日にかけて立法議会でコンドルセ(Condorcet, 1743-1794)が行った報告である。「公教育委員会の名において国民議会上に提出された公教育の組織全般にかんする報告と法令案」(以下、コンドルセ案)と題されたこの報告は、公教育委員会で行われた6ヶ月間の議論の結集である<sup>9</sup>。第2節ではタレーラン案が、第3節ではコンドルセ案がそれぞれ検討され、第4節で両者の歴史的意義が分析される。

## 2. タレーラン案

まず、タレーラン案の検討からはじめよう。タレーラン案には、学問分類の方法について言及している箇所がある。

知性 (*Intellectuelles*)。それは三つの分類に分たれました。想像力 (*Imagination*)、記憶 (*Mémoire*)、そして理性 (*Raison*) のことです。一つ目には、美術 (*Beaux-arts*) と文芸 (*Belles-lettres*) が属するように思われました。二つ目には、歴史 (*Histoire*) と言語 (*Langues*) が、三つ目には精密科学 (*Sciences exactes*) が、です。しかし、この区分は今となつては古く、これにもとづいた分類法は、撤回不可能なものとして定められているとはいいがたいのです。もはやそれらは、その原理を深く分析した人々からは、不完全でまったく恣意的なものともみなされています。とはいえ、人間知識の一覧表の最新版をなすものとして、それらを利用してまったく差し支えることはありません。〔それよりも〕肝心なことは、できあがった施設の中で、人間知識が包括する対象のすべてにまで教育が行き届くことなのです。それも、そこ〔一覧表〕には含まれない可能性のあるもののいずれも除外することなしに、です<sup>10</sup>。

ここからわかることは、タレーラン案が既存の学問分類から学問分野を導きだしていることである<sup>11</sup>。明言されていないが、それは『百科全書』の中で提示されたものだと考えられる。知性を記憶、理性、想像力の三つの心的能力に分けた上でそれぞれを学問分野と関係づける方法は、ベーコンの『学問の進歩』やディドロとダランベールの『百科全書』に特徴的である<sup>12</sup>。しかし、タレーランが直接的に念頭においているのは、時間的にも空間的にもより近い『百科全書』であると考えてよいであろう。さらに、『百科全書』の初版が刊行されたのは1751年であり、タレーランが報告した1791年からみると40年の歳月を経ている。以上を鑑みれば、タレーランがそれを「古い」と述べても不思議はないと思われる。

では、タレーラン案が提案する教育階梯の全体像を眺めてみることにしよう。タレーラン案において、公教育は行政区画に対応した4つの階層から成り立っている。小郡 (canton) には初等学校 (Ecole primaire) が、郡 (District) には中等教育に相当する郡学校 (Ecole de District) が、県 (Département) には専門学校に相当する県学校 (Ecole de Département) がそれぞれ対応している。初等学校と郡学校では共通のカリキュラムが想定されている。そして『百科全書』に倣った三つの心的能力に対応する学科も配分されている。しかし、県学校は特定の職業(聖職者、医者、法曹、軍人) にかんする訓練を与えることが目的となっているので、職業に応じて異なるカリキュラムが考案されている。なお、県学校では件の心的能力に由来する学問分類はなされていない。最後に国立学士院 (Institut national) が首都パリに置かれる<sup>13</sup>。

アカデミーのように学問の進歩を担う学者集団の組織として構想されたのが国立学士院である。ただし国立学士院がアカデミーと異なるのは、アカデミーが分野に応じていくつも並び立っていたのに対し、国立学士院はただひとつのみしか存在せず、それだけで文芸 (belles-lettres)、学問 (sciences)、技芸 (arts) のすべての発展に貢献するように設計されている点である。本稿で学問分野の分類のされ方を問題とするのも、主にこの国立学士院についてである。タレーランによれば、国立学士院は大きく二つに分けられる。ひとつは「哲学にかかわる学問、文芸と美術」であり、もうひとつは「数学と自然にかかわる学問と技芸」である。

まず、「哲学にかかわる学問、文芸と美術」(Sciences philosophiques, belles-lettres et beaux-arts) から見ていこう。図1は、「哲学にかかわる学問、文芸と美術の一覧表」(Tableau des sciences philosophiques, belles-lettres et beaux-arts) であり、タレーラン案の本文と一緒に印刷されたものである。一見すると、『百科全書』の図表と酷似しているように見えるが、一つひとつに目を通してみると、それとはかなり異なった分類の方法が採用されていることがわかる。タレーランは「一覧表」の上部に次の文章を置いている。



人は感じ、考え、推論し、発明し、身ぶりで、音声で、言葉を書いたり口にしたりすることで自らの思想を伝える。人は詩の、音の、形の、そして色の調和によって自らの感情を伝える。人は記念碑を打ち立ててそれらを神聖なものへと高める。人は存在の本性とは何であるかを、自らが何であるかを、自らの義務が何であるかを、自らの権利が何であるかを、自らが何が可能で、自らが何であったかを探究する<sup>15</sup>。

これは、人間のさまざまな能力を述べたものである。そして、図表の左端に人間(L'Homme)を置き、次いで上述のさまざまな能力を並べていく。それぞれの能力を分析していくことで、右端の学問分野へと結びつけられている。

ここからわかることは、タレーランが『百科全書』の学問分類をそのまま採用しているわけではないということである。タレーランは三つの心的能力に依拠したと述べているが、「一覧表」の中にそうした言葉は出てこない。その代わりに、感じること(sentir)、考えること(penser)、判断すること(juger)、推論すること(raisonner)、発明すること(inventer)、伝達すること(communiquer)という、人間の六つの能力にしたがって学問分類を行っている。そこからタレーランは、(1)道徳学、(2)統治にかかわる学問、(3)古代の歴史と古代の遺跡、(4)現代の歴史と言語、(5)文法、(6)雄弁術と詩学、(7)絵画と彫刻、(8)装飾と美術にかかわる建築学、(9)音楽、(10)朗読法の技術という十の学問分野を引き出している。

しかしこのことから、タレーランがベーコンよりもデイドロから学問分類にかんする着想を引き継いでいることは明らかである。『学問の進歩』の学問分類と『百科全書』のそれとの違いの一つは、後者が前者よりも人間に重きを置いたことである。ベーコンはアリストテレスの『靈魂論』に依拠して、(1)記憶、(2)想像力、(3)理性へと進むことを人間精神の本性とした。しかし、デイドロとダランベールはこれを(1)記憶、(2)理性、(3)想像力というように順番を入れ替えてしまった。ベーコンにとって知識に到達するとは、人間の恣意を排除した上で、それ自体が秩序だった体系である自然を写し取ることであった。ところがデイドロは、人間がなすものである以上、あらゆる体系は恣意を免れることは

できないという立場を取った。学問分類もまた人間に相対的なものにならざるをえない。ベーコンとデイドロは心的能力の三分法という同じ原理を採用しているように見えながら、それぞれの意図は異なっていたのである<sup>16</sup>。そして、人間を原理に据えている点は、タレーランがデイドロから引き継いだ着想である。ただし、心的能力の三分法の代わりに、人間の六つの能力を分類の基礎としている点は、タレーランの独自性であると言えるだろう。

次に、「数学と自然にかかわる学問と技芸」(Sciences mathématiques et physiques et les arts)を見てみよう。図2は「数学と自然にかかわる学問と技芸の一覧表」(Tableau des sciences mathématiques et physiques et les arts)である。第一部門のときと同様に、タレーランは第二部門にも冒頭に文章を添えている。

別の点から見れば、人は数を数え、広さを測ることができる。四つの偉大な手段によって、人は物体についての知識を明らかにした。それら物体について叙述せしめる観察、その仕組みを明らかにした実験、その内なる構成のされ方を深く理解するために人が用いる分析と総合である。これらの手段を用いて、人は物質にあっては、その一般的性質、さまざまな状態、そして運動や静止について考察する。大気において、その重さ、その温度、その揺らぎとそこでの現象について。音にあっては、その強さ、その速さ、その合成と調和について。熱にあっては、その伝わりと程度について。電気にあっては、その流れ、その釣り合い、その衝撃と稲妻について。光にあっては、その伝わりと色合いについて。磁石にあっては、その引きつけと極について。天にあっては、さまざまな現象が人に知られている天体について。大地にあっては、人が採集する鉱物について。人が鍛える金属について。人が分類する植物について。人はその器官や産物を検討する。人がその形態、生態、構造、要素、生と死、健康と病気について研究する動物について。人が耕す畑について。人が切り開く道について。人が掘る水路について。人が築き、堅牢ならしめる都市について。二つの世界を結ぶのに人が役立てる船について。人が自らの敵に差し向ける調和の整った軍隊、そして自



らの必要に応じて自然を従わせるために人が編み出した数多くの技芸についてである<sup>18</sup>。

ここでは、人間の身の回りに存在するさまざまな自然物が登場する。その自然物のそれぞれが自然学の中の学問分野一つひとつに対応している。同時に、数えること (calculer) や測ること (mesurer)、観察すること (observer)、実験すること (expérience)、分析すること (analyser)、総合すること (synthétiser) といった、人間に特有の能力のいくつかもここで援用されている。そこから導きだされる学問分野は、(1)数学と機械学、(2)自然学、(3)天文学、(4)化学と鉱物学、(5)動物学と解剖学、(6)植物学、(7)農学、(8)内科学、外科学、薬学、(9)建設にかかわる建築学、(10)技芸である<sup>19</sup>。ここでは、人間を原理とした学問分類ではなく、自然のさまざまな対象を学問分類の基礎に据えていることがわかるだろう。

タレーラン案は、フランス革命期に提出された公教育論の中でも最初期のものである。フランス革命は、科学革命から啓蒙主義にかけて起こっていた学問の革新を、はじめて公教育制度の中に反映する機会となった<sup>20</sup>。そして、それまでは別々のものであった学問分類にかんする議論と学問分野にかんする議論を結び合わせ、一つにしようとしたのがタレーラン案であったといえる。学問分類と学問分野を結びつけようとすることは、『学問論』のウァロをはじめとする自由七科の創設にかかわる一連の著述家に端を発する野心的な試みの近代版ともいえるものであったが、タレーラン案は遂に日の目を見ることはなかった。タレーラン案の後に公教育とその中の学問分野のあり方を論じているのが次に検討するコンドルセ案である。

### 3. コンドルセ案

では、コンドルセ案を検討してみよう。興味深いことに、報告の中でコンドルセはかなりの紙幅を費やして自らの学問分野の説明を行っている。その冒頭で、コンドルセはまるで弁明するような調子で話を始める。

教授のリストを一瞥してみると、そこではその教育内容が何らかの哲学的分類にしたがって分類されてはいないということに、そして古くからの教育の中では主流だった学問が等閑にされているように見えるのに、そこでは自然科学と数学がたいへん大きな位置を占めているということに、おそらく気づかれることでしょう<sup>21</sup>。

どうやらコンドルセは、前例のないやり方でカリキュラムの内容を刷新したのだと認識していたようである。では、この哲学的分類 (division philosophique) とは何であろうか。コンドルセは続ける。

おそらくは学問を哲学的に分類してみても、それを適用しようとするれば厄介なだけでしょうし、それにほぼ実行不可能でもあったことでしょう。じっさい、精神のさまざまな心的能力が〔学問分類の〕基礎になるのでしょうか。ところが、それぞれの学問研究はそれらすべてをすっかり働かせて、それらを発展させ、完成させるのに役立つのです。われわれは、ほとんどどんな知的作業にあっても、〔さまざまな心的能力の〕すべてを同時に働かせさえるのです。〔…〕どうやって皆さんは、人間の知識のこれこれの部分は記憶に、これこれの部分は想像力に、これこれの部分は理性に割り振るといえるのでしょうか<sup>22</sup>。

記憶 (mémoire)、想像力 (imagination)、理性 (raison) という三つの特徴的な概念が並べられていることを考慮すれば、ここでコンドルセが批判しているのがさきに検討した三つの心的能力であることは明らかである。つまりコンドルセは、ベーコンやディドロの学問分類を範として組織された学問分野は、制度の中で運用するに耐えないものとして退けているのである。もちろん、この箇所はコンドルセ案に先立って公にされていたタレーラン案に対する批判としても読むことができる。

コンドルセの批判はさらに続く。次の批判は、よりタレーラン案が意識されたものであることが明らかであるように思われる。すなわち、どんな対象を研究するかに応じて学問分野を分ける方法を批判しているのである。

〔では〕対象の性質が〔学問分類の〕基礎になるでしょうか。ところが、同じ対象であっても、それを検討するやり方に応じて、まったく異なる諸学問に属することになるのです。これらの学問は、同じひとりの人物が身につけること類い稀な精神の能力をどうしても必要とするのです。そのため、これら教育分類のそれぞれに合わせて同一対象を教えられる人物を見つけ出そうとすれば、そしておそらくは養成しようとするれば、それは困難を極めることでしょう。このように分類された同一の学問は同一の職業に結びつけられはしないでしょうし、彼らの専門は同じひとつの精神に同等の魅力を感じさせるわけでもないでしょう。そして、これらの分類は教師と同様に生徒をも疲れさせてしまうことでしょう<sup>23</sup>。

タレーラン案の国立学士院における第二部門の学問分類は、人間を取り巻く自然のさまざまな対象から、それぞれの学問分類を引き出していたことが思い出される。その結果、第二部門の図表に並べられた細かな学問分類の数は三十を超えている。これは、第一部門の図表に並べられた学問分類の数が十五程度であることを考えると多すぎるように思われる。コンドルセはさらに追い打ちをかけるように批判を続ける。

他のどのような哲学的な基礎を選んだとしても、いつも同じ種類の障害によって立ち往生することになるでしょう。さらに、それぞれの分野にかなりの程度の広がりにあたえなければなりませんでしたが、それらのあいだに一種のバランスを取らなければなりませんでしたが、ところが、どんな哲学的分類にあっても、分類によって別々にしてしまったものを教育によってひとつにまとめることでしか、それを成し遂げることはできなかったの

です<sup>24</sup>.

こうして、コンドルセの批判は三つに要約される。第一に、人間の三つの心的能力に基づく学問分類に依拠した学問分野はじっさいに運用することが不可能だということ。第二に、対象の性質に基づいた学問分類を基礎とした学問分野も、やはり運用が困難だということ。第三に、学問分野のあいだのバランスを取るためには、どんな種類の哲学的分類を使ってもうまくいかないということ、以上の三つである。

では、コンドルセ自身はどうやって学問分野を区分しているのか。これまでの哲学的分類は哲学 (philosophie) によって、つまり理性 (raison) によって導きだされたもので、思弁的な性格を帯びたものであった。それを棄却したコンドルセの学問分類は、したがって経験的な性格を帯びてくる。じっさい、コンドルセが援用する学問分類は自然にできあがってきたものだという。

それゆえ私どもの分類では、人間精神が研究を進める中で辿ってきたあゆみが模範とされました。[...] 学業を分類することはどうしても必要なことなので、私どもは、あらゆる種類の知識がこの半世紀に急速な進歩を遂げる中で、おのずとできあがった分類を選ばざるを得なかったのです<sup>25</sup>。

ここでいう「半世紀のあいだに起こった学問の進歩」とは具体的には何か。そして「おのずとできあがった分類」とは、いつ、どこでできあがったものか。疑問はいくつも湧いてくるが、この報告だけではこれ以上のことは説明されていない<sup>26</sup>。しかし、18世紀の啓蒙主義がもたらした哲学や、アカデミーでなされた研究の数々がここで念頭に置かれているのだと考えられる。

手がかりの一つは、『百科全書』の刊行が始まった18世紀中葉からフランス革命が起こった18世紀末葉にかけて、学問分野の専門分化が急激に進展したという見解である。『百科全書』とその後継であるパンクーク (Panckoucke,

1736-1798)の『方法的百科全書』(*Encyclopédie méthodique*)が出版されるまでの事情を研究したR・ダーントンは、ディドロの世代とパンクークの世代のあいだには、確固とした専門家集団が存在するかどうかの違いがあると指摘する。すなわち、革命前夜のフランスにあっては、すでに社会の中に専門分野のカテゴリーが人々の意識の中に存在していたということである。一冊のうちにあらゆる知識を包括させようとしたディドロの『百科全書』とは異なり、パンクークは、『方法的百科全書』を学問分野ごとの分冊とした。このように、専門家集団が社会の中に存在するという事実によっておのずと学問分類ができあがっていたのである<sup>27</sup>。

したがって、コンドルセは、タレーランが学問分類と学問分野を結びつけようとしたのに対して、社会の中に専門家集団というかたちで自然に確立していた学問分野を自らの公教育論の中に反映させたといえるだろう。タレーランによる思想としての学問分類と制度としての学問分野を合一させようとする試みはコンドルセの批判にさらされ、結果として学問分野の専門分化が促進されることとなったのである。それゆえ、学問分野の専門分化が進むのは通常19世紀になってからであるというのが通説であるが、すでに18世紀末葉にはコンドルセ案によって学問の専門分化が始まっていたことになる。

では、コンドルセ案の中の学問分類が具体的にどのようなになっているのか見ていくことにしよう。コンドルセ案では、5つの教育階梯が設けられている。初等学校(*Ecole primaire*)、中等学校(*Ecole secondaire*)、学院(*Institut*)、リセ(*Lycée*)、そして国立科学技芸協会(*Société nationale des sciences & des arts*; 以下、国立協会)である<sup>28</sup>。

では、それぞれの教育階梯の学問分類はどうなっているのだろうか。初等学校と中等学校では基礎知識の教授が重視されているが、学院以上の階梯ではいっそう学問分類が専門化していく様子がうかがえる。

まず、初等学校である。ここで教えられる科目は、読み(*lire*)、書き(*écrire*)、計算(*les règles de l'arithmétique*)、それから道徳(*moral*)、自然(*naturel*)、経済(*économique*)についての初歩的な知識が教授される。なお、農村では農学(*agri-*

culture) の知識が重視されるのに比べて、都市では技芸 (arts) と商業 (commerce) の知識がより重視される違いはあるが、基本的な科目編成は同じである<sup>29</sup>。

次に、中等学校である。第一に、文法の知識 (les notions grammaticales), フランスと近隣諸国の歴史 (histoire) と地理 (géographie)。第二に、工芸 (art mécanique) の原理, 商業 (commerce) の実践的な基礎知識, 製図 (dessin)。第三に、道徳学 (morale) と社会科学 (science sociale) の基礎, 主要な法律 (lois) の説明, 規約 (conventions) と契約 (contrats) の諸規則。第四に、技芸 (arts), 農業 (agriculture), 商業 (commerce) にかかわる範囲の数学 (mathématiques), 自然学 (physique), 自然史 (histoire naturelle) が置かれている<sup>30</sup>。

この段階から、国立協会で採用されている四つの分類が現れているのが見て取れる。すなわち、(1)数学および自然科学 (sciences mathématiques & physiques), (2)道徳および政治科学 (sciences morales & politiques), (3)科学の技芸への応用 (Application des sciences aux arts), (4)文学および美術 (Littérature & beaux-arts) である。だが、この分類が本格的に導入されるのは次に検討する学院からである。

『百科全書』やタレーラン案にみられるような学問分類の一覧表は、コンドルセ案には含まれていない。その代わりに、報告の末尾に付されている法案 (projet de décret) の中で、初等学校から国立科学技芸協会まで順々に列記されている。表1は、学院、リセ、国立協会それぞれの学問分類を法案から取り出して作成したものである<sup>31</sup>。

コンドルセ案では、学院から国立協会にいたるまで、四つの学問分類が貫徹されている。それは、(1)数学および自然科学 (Sciences mathématiques & physiques), (2)道徳および政治科学 (Sciences morales & politiques), (3)〔数学および自然〕科学の技芸への応用 (Application des sciences aux arts), (4)文学および美術 (Littérature & beaux-arts) の四つである。法案では、これらの学問分類それぞれの中に下位の学問分類があてがわれ、それらを担当する教授の人数が指示されている。

まず、学院である。その第一部門は、(1)純粋数学 (mathématiques pures), (2)機械学 (mécanique), 光学 (optique), 天文学 (astronomie) の基礎を含む応用数学

表1 コンドルセ案の各教育階梯における学問分類の一覧

学院	リセ	国立協会
<p>数学および自然科学</p> <p>1. 純粋数学</p> <p>2. 応用数学（力学、光学、天文学それぞれの初歩と、自然学や道徳および政治科学への、算術と幾何学の最も有用な部分の初歩的な応用を含む）</p> <p>3. 実験自然学、実験化学（農学の初歩を含む）</p> <p>4. 鉱物界、植物界、動物界の博物学</p>	<p>1. 幾何学、解析学</p> <p>2. 力学、水力学、天体力学、解析の自然対象への応用</p> <p>3. 算術の道徳および政治科学への応用</p> <p>4. 数学的地理学</p> <p>5. 観測天文学</p> <p>6. 実験自然学</p> <p>7. 化学</p> <p>8. 鉱物学、地質学</p> <p>9. 植物学、植物自然学</p> <p>10. 動物学</p> <p>11. 昆虫学または昆虫の描写</p>	<p>1. 解析学</p> <p>2. 理論力学、天文学</p> <p>3. 自然学</p> <p>4. 化学、鉱物学</p> <p>5. 植物学、植物自然学</p> <p>6. 動物学、解剖学</p>
<p>道徳および政治科学</p> <p>1. 感覚と観念の分析、道徳学、科学の方法または論理学、政体の一般原理</p> <p>2. 法学、政治経済学、商学の初歩</p> <p>3. 地理学、諸国民の哲学的歴史</p>	<p>1. 科学の方法、感覚と観念の分析、道徳学、自然法</p> <p>2. 社会科学、政治経済学、財政学、商学</p> <p>3. 公法、一般法学</p> <p>4. フランス法</p> <p>5. 年代学、地理学、諸国民の哲学的かつ政治的歴史</p>	<p>1. 形而上学、道徳感情論</p> <p>2. 自然法、万民法、社会科学</p> <p>3. 公法、法学</p> <p>4. 政治経済学</p> <p>5. 歴史学</p>
<p>科学の技芸への応用</p> <p>1. 比較解剖学、産科学、獣医学</p> <p>2. 医学実習</p> <p>3. 兵学</p> <p>4. 工芸の一般原理（または定規とコンパスを用いて算術、幾何学、透視図法などの解答にたどり着く方法）</p>	<p>1. 解剖学、生理学 2. 薬学、薬科</p> <p>3. 医学理論（病理学、症候学、疾病分類学、治療学を含む） 4. 内科・外科実習</p> <p>5. 分娩・産褥期の母体及び新生児の疾患に関する理論と実践 6. 獣医学</p> <p>7. 医学史、医学の方法、法医学、衛生学</p> <p>8. 農学、農業経済学</p> <p>9. 鉱床掘削法</p> <p>10. 兵学の理論と演習 11. 航海学</p> <p>12. 截石法、建築・工芸の幾何学的分野</p> <p>13. 工芸の機械学的かつ物質的分野</p> <p>14. 工芸の化学的分野</p>	<p>1. 内科学、外科学</p> <p>2. 衛生学</p> <p>3. 獣医学</p> <p>4. 農学、農業経済学</p> <p>5. 建築術</p> <p>6. 水力学</p> <p>7. 航法</p> <p>8. 機械学、器械学</p> <p>9. 機械学的技芸</p> <p>10. 化学的技芸</p>
<p>文学および美術</p> <p>1. 美術の概括的かつ初歩的な理論</p> <p>2. 一般的な文法、作文技法</p> <p>3. ラテン語</p> <p>4. (いくつかの学院にはギリシャ語コースを設置)</p> <p>5. 外国語</p>	<p>1. 美術理論概論、特に詩学、雄弁術</p> <p>2. 古代文明</p> <p>3. 東洋語</p> <p>4. ギリシャ語、ギリシャ文学</p> <p>5. ラテン語、ラテン文学</p> <p>6. 現代語、現代文学</p> <p>7. 絵画、彫刻、建築のための画法</p> <p>8. 音楽理論、作曲理論</p>	<p>1. 文法、批評</p> <p>2. 言語</p> <p>3. 雄弁術、詩学</p> <p>4. 古代文明、遺跡</p> <p>5. 絵画、彫刻、建築</p> <p>6. 音楽、朗読法</p>

Condorcet (1792) より作成。

(mathématiques appliquées) で、ここでは算術 (calcul) および幾何学 (géométrie) を自然科学と道徳および政治科学に応用するとも述べられている。(3)実験的な自然科学および化学 (physique et chimie expérimentales), (4)〔鉱物界, 植物界, 動物界という〕三つの界の自然史 (histoire naturelle des trois règnes) である。

次に、学院の第二部門である。(1)感覚と観念の分析 (analyse des sensations et des idées), 道徳学 (morale), 科学の方法または論理学 (méthode des sciences ou logique), そして政体の一般原理。(2)法学 (legislation), 政治経済学 (économie politique), 商業の基礎 (éléments de commerce)。(3)地理学 (géographie), 諸国民の哲学的歴史 (histoire philosophique des peuples) である。続いて、学院の第三部門である。(1)比較解剖学 (anatomie comparée), 産科学 (accouchemens), 獣医学 (arts vétérinaire)。(2)医学実習 (médecine-pratique), (3)兵学 (art militaire), (4)工芸 (arts & métiers) である。

最後に、学院の第四部門である。(1)美術の概括的かつ初歩的な理論 (théorie générale & élémentaire des beaux-arts), (2)一般的な文法, 作文技法 (grammaire générale & d'art d'écrire), (3)ラテン語 (langue latine), (4)ギリシャ語 (langue grecque), (5)外国語 (langues étrangères) である。

こうしてみると、学院のカリキュラム編成ははじめの専門分化のように見える。第一部門は数学および自然科学に本格的に入門し、将来の科学者を養成するための登竜門のような位置づけになる。第二部門は法学や政治経済を学ぶ場となっているが、注目すべきことはその中に「科学の方法または論理学」の科目が含まれていることである。ここに、社会現象に科学の方法を適用することにこだわっていたコンドルセの思想が汲み取られるだろう<sup>32</sup>。また、「感覚と観念の分析」という科目が注目に値する。『百科全書』にもタレーラン案にも、これに相当する科目は存在していない。推測するに、これはコンディヤック (Condillac, 1715-1780) の『感覚論』(Traité des sensations, 1754) から影響を受けた科目である。第三部門は医者、軍人、技師といった専門職業に就くための職業訓練の導入といった様相を呈している。第四部門にはラテン語やギリシャ語といった伝統的なカリキュラムの片鱗がみられるが、古代語だけでなく同時代の

外国語の学習も置かれている。

次に、リセに目を移そう。リセでは、学院よりも学問分類の専門分化がいつそう進んでいるように思われる。その一つひとつに目を向けてみよう。まずは第一部門である。(1)純粋幾何学および解析学 (géométrie transcendante & analyse mathématique), (2)機械学 (mécanique) 水力学 (hydraulique), 天文力学 (mécanique céleste), 解析の自然物への応用 (application de l'analyse aux objets physiques), (3)算術の道徳および政治科学への応用 (applications du calcul aux sciences morales & politiques), (4)数学的地理学 (géographie mathématique), (5)観測天文学 (astronomie d'observation), (6)実験自然学 (physique expérimentale), (7)化学 (chimie), (8)鉱物学および地質学 (minéralogie & géologie), (9)植物学および植物自然学 (botanique & physique végétale), (10)動物学 (zoologie) である。

次に、リセの第二部門である。(1)科学の方法 (Méthode des sciences), 感覚と観念の分析 (analyse des sensations & des idées), 道徳および自然法 (morale & droit naturel), (2)社会科学 (science sociale), 政治経済学 (économie politique), 財政学 (finances), 商学 (commerce), (3)公法および一般法学 (droit public & législation générale), (4)フランス法 (législation française), (5)年代学 (chronologie), 地理学 (géographie), 諸国民の哲学的かつ政治的な歴史 (histoire philosophique & politique des différents peuples) である。

そして、リセの第三部門である。(1)解剖学および生理学 (anatomie & physiologie), (2)薬学および薬理学 (pharmacie & matière médicale), (3)病理学 (pathologie), 症候学 (séméiologique), 疾病分類学 (nosologie), 治療学 (thérapeutique) をふくむ医学理論 (médecine théorique), (4)内科および外科実習 (médecine pratique des maladies internes & externes), (5)分娩・産褥期の母体及び新生児の疾患にかんする理論と実践 (théorie & pratique des accouchemens), (6)獣医学 (Art vétérinaire), (7)医学史および医学の方法 (histoire & la méthode de la médecine), 法医学 (médecine légale), 衛生学 (hygiène), (8)農学および農業経済学 (agriculture & économie rurale), (9)鉱床掘削法 (art d'exploiter), (10)兵学の理論と演習 (théorie de l'art militaire), (11)航海学 (science navale), (12)截石法 (stéréotomie), 建築および工芸の幾何学的分野

(partie géométrique des construction, & des arts et métiers), (13)工芸の機械学的かつ物質的分野 (Partie mécanique & physique des arts & métiers), (14)工芸の化学的分野 (partie chimique des arts & métiers) である。

最後に、リセの第四部門である。(1)美術理論概論 (Théorie des beaux arts), 特に詩学, 雄弁術 (poésie & éloquence), (2)古代文明 (Antiquités), (3)東洋語 (langues orientales), (4)ギリシャ語およびギリシャ文学 (langue & littérature grecque), (5)ラテン語およびラテン文学 (langue & littérature latine), (6)現代語および現代文学 (langue & littérature modernes), (7)絵画, 彫刻, 建築のための画法 (Dessin pour la peinture, la sculpture & l'architecture), (8)音楽理論, 作曲理論 (théorie de la musique & composition) である。

学院と同様にリセでも目を引くのは, 第一部門の中に「算術の道德および政治科学への応用」が含まれていることである。この科目はイギリスのウィリアム・ペティ (William Petty, 1623-1687) によって広められた政治算術 (arithmétique politique) を彷彿させる。また, 第二部門の中にも「科学の方法」の科目が引き継がれていることも, 第一部門と第二部門を同じ「科学」として統一的に捉えようとしていた策定者の意図が伺える。コンドルセ自身, 自らの研究の中で社会数学 (mathématique sociale) という学問を創出しようとしていたことを顧みれば, コンドルセ案はコンドルセの希望がかなりの程度まで反映されたカリキュラムになっているように思われる。

最後に, コンドルセ案の最終階梯に当たる国立協会を見てみよう。まず, 第一部門である。(1)解析学 (analyse mathématique), (2)理論力学および天文学 (mécanique rationnelle, astronomie), (3)自然学 (physique), (4)化学および鉱物学 (chimie & minéralogie), (5)植物学および植物自然学 (botanique & physique végétale), (6)動物学および解剖学 (zoologie & anatomie) である。

次に, 国立協会の第二部門である。(1)形而上学 (méthaphysique), 道德感情論 (théorie des sentimens moraux), (2)自然法 (droit naturel), 万民法 (droit des gens), 社会科学 (science sociale), (3)公法 (droit public), 法学 (législation), (4)政治経済学 (économie politique), (5)歴史学 (histoire) である。

そして、国立協会の第三部門である。(1)内科学および外科学 (Physique médicale & Chirurgie), (2)衛生学 (Hygiène), (3)獣医学 (Art vétérinaire), (4)農学および農業経済学 (Agriculture & Economie rurale), (5)建築術 (Arts de construction), (6)水力学 (hydraulique), (7)航法 (navigation), (8)機械および器具 (machine & instruments), (9)機械学的技芸 (arts mécanique), (10)化学的技芸 (arts chimiques) である。

最後に、国立協会の第四部門である。(1)文法および批評 (grammaire & critique), (2)言語 (langues), (3)雄弁術および詩学 (éloquence & poésie), (4)古代文明および遺跡 (antiquités & monumens), (5)絵画 (peintures), 彫刻 (sculpture), 建築 (architecture), (6)音楽および朗読法 (musique & déclamation) である。

国立協会になると、そこでの学問分野はリセのものよりも数を減らしている。また、各部門の中でも学院やりセのものとは異なる名称のものを含んでいる場合も少なくない。たとえば、学院とりセでは第二部門に「科学の方法」や「感覚と観念の分析」があったのに対し、国立協会になると忽然と姿を消している。代わりに現れるのが、「形而上学」と「道徳感情論」である。とりわけ「道徳感情論」(théorie des sentimens moraux) が目を引く。なぜなら、アダム・スミス (1723-1790) の『道徳感情論』(The Theory of Moral Sentiments) に倣っているように思われるからである。コンドルセ案の中でも、直接アダム・スミスの名前に言及してはいないが、『国富論』(An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations, 1776) を彷彿させる記述が見られる<sup>33</sup>。ここから、アダム・スミスやスコットランド啓蒙主義 (Scottish Enlightenment) がフランスの学者たちに与えた影響の痕跡を見て取ることができる<sup>34</sup>。

このように、コンドルセ案はそれまでの『百科全書』に由来する学問分類を批判した上で、まったく新しい学問分類を提案した。それは、数学および自然科学に対して格別の地位を与えた上で、新しいカテゴリーとして道徳および政治科学を組み込んでいる。そして、それらには17世紀から18世紀に登場した新しい学問がちりばめられている。いいかえれば、コンドルセ案はそうした新しい学問群を、国家の最高学術機関である国立協会の学問分類として組み込むことで、国家の承認を得た正統な学問の地位にまで高めたといえる。

#### 4. 公教育論の帰結

これまで、タレーラン案とコンドルセ案という二つの公教育論を取り上げ、その中で示された学問分野の様相を分析してきた。その結果、タレーラン案は、直接的には『百科全書』から学問分類の枠組みを借用し、自らの公教育論の中に学問分野という形で反映させたのに対して、コンドルセは社会にすでに存在していた学問分野を採用した。この二つの公教育論は、どのような意義を持っているのだろうか。

表2は、タレーラン案およびコンドルセ案と、最終的に可決された法案それぞれの学問分類をまとめたものである。三つ目は、革命暦4年ヴァンデミエール27日(1795年10月19日)に国民公会でドヌー(1761-1840)によって報告され、六日後のブリュメール3日(10月25日)に可決された「公教育の組織にかんする法律」(以下、ドヌー法)である<sup>35</sup>。

表2を見ると、これまでの検討してきた二つの公教育論の中の学問分野を俯瞰することができると同時に、ドヌー法への二案の影響を見て取ることができる。まず、各法案の大分類の数からして異なっている。タレーラン案は二つ、コンドルセ案は四つ、そしてドヌー法は三つである。さらに、それら大分類の中の小分類にたちいってみれば、大小さまざまな異同がみとられる。とはいえ、コンドルセ案とドヌー法は類似している点が多い。じつは、ドヌーはタレーラン案とコンドルセ案から国立学士院のアイディアを借用したとを述べている<sup>36</sup>。国立学士院の学問分野に限れば、ドヌー法はタレーラン案よりもコンドルセ案に似ている。ドヌー法の第一部門「自然科学および数学」、第二部門「道徳および政治科学」、第三部門「文芸および美術」は、コンドルセ案の国立科学技術協会の第一部門「数学および自然科学」、第二部門「道徳および政治科学」、第四部門「文芸および美術」にそれぞれ対応しているように見えるからである。それに対して、先に提出されたタレーラン案に比べて、コンドルセ案は学問分野の分け方を抜本的に転換していることがわかる。

表2 タレーラン案, コンドルセ案, ドヌー法における学問分類の一覧

タレーラン案		コンドルセ案		ドヌー法	
哲学にかかわる学問, 文芸と美術	1. 道徳学	数学および自然科学	1. 解析学	自然科学および数学	1. 数学
	2. 統治にかんする学問		2. 理論力学, 天文学		2. 工芸
	3. 古代の歴史と言語		3. 自然学		3. 天文学
	4. 現代の歴史と言語		4. 化学・鉱物学		4. 実験自然学
	5. 文法		5. 植物学・植物自然学		5. 化学
	6. 雄弁術・詩学		6. 動物学・解剖学		6. 自然史, 鉱物学
	7. 絵画・彫刻	道徳および政治科学	1. 形而上学, 道徳感情論		7. 植物学, 植物自然学
	8. 装飾・美術にかかわる建築		2. 自然法, 万民法, 社会科学		8. 解剖学, 動物学
	9. 音楽		3. 公法, 法学		9. 内科学, 外科学
	10. 朗読法		4. 政治経済学		10. 農業経済学
数学と自然にかかわる学問と技芸	1. 数学・機械学	科学の技芸への応用	1. 内科学, 外科学	道徳および政治科学	1. 感覚と観念の分析
	2. 自然学		2. 衛生学		2. 道徳
	3. 天文学		3. 獣医学		3. 社会科学・立法
	4. 化学・鉱物学		4. 農学・農業経済学		4. 政治経済学
	5. 動物学・解剖学		5. 建築学		5. 歴史学
	6. 植物学		6. 水力学		6. 地理学
	7. 農学		7. 航法	文芸および美術	1. 文法
	8. 内科学・外科学・薬学		8. 機械学, 器械学		2. 古代語
	9. 建設にかかわる建築学		9. 自然学的技芸		3. 詩学
	10. 技芸		10. 化学的技芸		4. 考古学
	文芸および美術	1. 文法, 批評	5. 画法		
		2. 言語	6. 彫像		
		3. 雄弁術, 詩学	7. 造形		
		4. 古代文明, 遺跡	8. 音楽・朗読法		
		5. 絵画, 彫刻・建築			
		6. 音楽, 朗唱法			

Talleyrand-Périgord (1791), Condorcet (1792), Duvergier (1834-1845) より作成.

最終的に施行されるのはドヌー法だけである。しかしドヌーは、自らの法案がタレーラン案とコンドルセ案に多くを負っていると明言している。したがって、フランス革命期の公教育論の中で後世に大きな影響を与えたのはタレーラン案とコンドルセ案である。だが、学問分類に限っていえば、ドヌー法はタレーラン案よりもコンドルセ案に類似している。さらに、タレーラン案とコンドルセ案は時間的に前後して提出されながら、それぞれが大きく異なる学問分類を採用している。それゆえ、タレーラン案とコンドルセ案のあいだに学問分野の転換が起こったと考えることができる。すなわち、タレーランは思想としての学問分類を制度としての学問分野と結びつけようとしたが、コンドルセによって再び両者は引き離され、思想としての学問分類は19世紀にコント(Comte, 1798-1857)、アンペール(Ampère, 1775-1836)などの著述に限定され、20世紀になると衰退していく<sup>37</sup>。その意味で、タレーラン案からコンドルセ案への移行は、フランス革命期の公教育論の中に反映された百科全書主義から学問の専門分化への移行として読み解くことができるだろう。

## 5. 結論

本稿で明らかになったことは、学問分類にかかわる議論が、じつはフランス革命期の公教育論の中で行われていたという事実である。それは、タレーラン案の中で展開されていた。コンドルセ案が公教育論としての重要性から長く注目されてきたのに対し、早急に廃案とされてしまったタレーラン案はそれほど注目を浴びることはなかった。しかし、時間的に前後して提出されたタレーラン案とコンドルセ案のあいだでは、将来の学問分野をどうするかという問題についての異なる二つの見解が戦わされていたのである。そして、『百科全書』から『方法的百科全書』への移行と類似の転換が、公教育論の中でも起こっていたというのは興味深い事実であるように思われる。

心的能力のような何らかの原理によって学問全体の分類を行い、それによって学問(科学)全体の統一を表現しようとする試みは19世紀にまで続いてい

く。しかし、少なくともフランスでは、おそらくはタレーラン案を最後に、思想としての学問分類と制度としての学問分野を結びつけようとする機会は途絶え、時代は19世紀の専門分化の時代を迎えることになる。20世紀になると学問の行き過ぎた専門分化が問題視され、学際的研究をはじめとするさまざまな方法でその克服が試みられることになる<sup>38</sup>。そして、今日まで続く学問の専門分化の端緒は、18世紀末葉にまで遡ることができる。この問題を検討するに際して、いかにして専門分化が始まったのかを歴史的に研究することは示唆深いように思われる。

## 註

- 1 学問分類史を扱った研究としては、次のものが今日でも最も包括的である。Robert Flint, *Philosophy as Scientia Scientiarum and a History of Classifications of the Sciences* (Edinburgh: W. Blackwood, 1904).
- 2 Nicholas Fisher, "The Classification of the Sciences," in *Companion to the History of Modern Science*, ed. Robert C. Olby et al. (London: Routledge, 1990): pp. 853-868, on pp. 855-857; James A. Weisheipl, "The Nature, Scope and Classification of the Sciences," in *Science in the Middle Ages*, ed. David C. Lindberg (Chicago: University of Chicago Press, 1978): pp. 461-482, on pp. 466-468; Pierre Speziali, "Classification of the Sciences," in *The Dictionary of the History of Ideas: Studies of Selected Pivotal Ideas*, 5 vols., ed. Philip P. Wiener (New York: Scribner's, 1968-74) vol. 1: pp. 462-467, on p. 463; Flint, *Philosophy as Scientia Scientiarum*, pp. 77-81.
- 3 James A. Weisheipl, "Classification of the Sciences in Medieval Thought," *Mediaeval studies* 27.1 (1965): pp. 54-90, on p. 55; 伊東俊太郎『近代科学の源流』(中公文庫, 2007年), 48-49 ページ。
- 4 Richard Yeo, "Classifying the Sciences," in *The Cambridge History of Science, Vol. 4: Eighteenth-Century Science*, ed. Roy Porter (Cambridge: Cambridge University Press, 2003): pp. 241-266, on pp. 256-263.
- 5 Michel Malherbe, "Bacon, Diderot et l'Ordre Encyclopédique," *Revue de Synthèse* 115.1-2

(1994): pp. 13-37, on p. 14; Robert Darnton, “Philosophers Trim the Tree of Knowledge: The Epistemological Strategy of the Encyclopédie,” in *The Great Cat Massacre and Other Episodes in French Cultural History* (New York: Basic Books, 1984): pp. 191-215, on pp. 196-197. ダーントンはまた、ディドロとダランベールがベーコンに範を求めながら、ロックの認識論に依拠することで神学の学問的正統性を瓦解させることを目指したと指摘している。

6 Riki G. A. Dolby, “Classification of the Sciences: The Nineteenth Century Tradition,” in *Classifications in Their Social Context*, ed. Roy F. Ellen and David Reason, (London: Academic Press, 1979): pp. 168-193.

7 翻訳については次を参照。コンドルセほか『フランス革命期の公教育論』阪上孝編訳（岩波書店，2002年）；タレイランほか『フランス革命期の教育改革構想』志村鏡一郎訳（明治図書出版，1972年）。また，フランス革命期の公教育論についての日本で行われた研究は次を参照。梅根悟編『世界教育史大系9——フランス教育史I』（講談社，1975年）；松島鈞『フランス革命期における公教育制度の成立過程』（亜紀書房，1968年）；石堂常代『フランス公教育論と市民育成の原理——コンドルセ公教育論を起点として』（風間書房，2013年）。

8 フランス革命期の科学制度についての研究は次を参照。Charles C. Gillispie, *Science and Polity in France: The Revolutionary and Napoleonic Years* (Princeton: Princeton University Press, 2004).

9 Charles-Maurice de Talleyrand-Périgord, *Rapport sur l’Instruction Publique, Fait au nom du Comité de Constitution à l’Assemblée Nationale, les 10, 11 et 19 Septembre 1791* (Paris: Imprimerie nationale, 1791); Jean-Antoine-Nicolas de Caritat, Marquis de Condorcet, *Rapport et Projet de Décret sur l’Organisation Générale de l’Instruction Publique : Présentés à l’Assemblée Nationale, les 20 et 21 Avril 1792* (Paris: Imprimerie nationale, 1792). 公教育委員会 (Comité d’instruction publique) とは，立法議会 (Assemblée législative) 内に発足した委員会の一つである。1791年10月30日に第1回の審議が行われ，長くコンドルセが議長 (président) を務めた。その目的は，1791年憲法によって要請された公教育制度を考案することであった。同年11月10日の審議で公教育委員会はさらに4つの分科会を設ける。その第3部会が「最良の公教育制度を検討する」ことを任務としたもので，24人の委員から

さらに5人が選出されたことから、「5人委員会」(Commission des Cinq)と呼ばれることもあった。メンバーは、コンドルセ、ラセペード (Lacépède, 1756-1825), アルボガスト (Arbogast, 1759-1803), パストレ (Pastoret, 1755-1840), ロム (Romme, 1750-1795) である。コンドルセ案は、この分科会の中で検討された。そのため、厳密に言えば「コンドルセ案」はコンドルセだけの案ではない。しかし、議会へ報告する際に登壇したのがコンドルセであったこと、彼が議長として委員会を牽引していたこと、彼が『公教育にかんする五つの論文』を独自に公刊していたこと、その論文が1791年11月5日に公教育委員会で審議されていることなどを考えると、コンドルセが同案に対して大きな影響力をもっていたことは否めない。なお、公教育委員会の議事録については次を参照。James Guillaume, *Procès-Verbaux du Comité d'Instruction Publique de l'Assemblée Législative* (Paris: Imprimerie nationale, 1889).

10 Talleyrand, *Rapport sur l'Instruction Publique*, p. 14. なお、本稿の引用文は原則として筆者による拙訳であり、□は著者による補足である。

11 本稿では、学問分類 (classification of sciences) と学問分野 (discipline) という言葉を区別して用いることとする。学問を分類するという営みは、著述の中で表現される思弁的な性格をもつものから、より社会生活の実践的な場面で利用されることを目的としたものまでさまざまである。例えば、学問分類といっても図書館における書物の分類、大学などの研究や教育を目的とした制度におけるカリキュラムの分類、そして辞書や百科事典における知識の分類は区別されねばならない。そこで本稿では、学問の区分についてある特定の見解を示すことを目的としたものを「学問分類」とし、教育上のカリキュラムや学問従事者の専門分野を示す場合は「学問分野」と表記することとする。

12 ただし、心的能力を記憶、想像力、理性に分けたのも、それらの心的能力を学問分類と結びつけたのもベーコンが最初というわけではない。ベーコンの新しさは、心的能力に基づいて学問全体の相互関係を説明しようとしたことにある。Sachiko Kusukawa, “Bacon’s Classification of Knowledge,” in *The Cambridge Companion to Bacon*, ed. Markku Peltonen (Cambridge: Cambridge University Press, 1996): pp. 47-74, on pp. 51-52. 心的能力と学問分類を結びつけたベーコン以外の例については次を参照。Cf. Paula Find-

len, “Building the House of Knowledge: The Structures of Thought in Late Renaissance Europe,” in *The Structure of Knowledge Classifications of Science and Learning Since the Renaissance*, ed. Tore Frängsmyr (Berkeley: University of California Press, 2001): pp. 5-51, on p. 12.

13 Talleyrand, *Rapport sur l’Instruction Publique*, p. 58.

14 Talleyrand (1791) より筆者作成.

15 Ibid., p. 59.

16 Malherbe, “Bacon, Diderot et l’Ordre Encyclopédique,” pp. 30-33.

17 Talleyrand (1791) より筆者作成. 判読不可能な箇所は [...] で示した.

18 Talleyrand, *Rapport sur l’Instruction Publique*, pp. 59-60.

19 Ibid., pp. 64.

20 もちろん、フランス革命までのあいだにも学問の革新を反映した制度上の変動は存在した。アカデミーの勃興はその最たるものであるし、中世以来の伝統的な学問体系を堅守してきたと考えられてきた大学においてもその影響は及んでいた。アカデミーについては、次を参照。James E. McClellan III, *Science Reorganized: Scientific Societies in the Eighteenth Century* (New York: Columbia University Press, 1985). 革命以前に大学に起こった変化については次を参照。Olaf Pedersen, “Tradition and Innovation,” in *A History of the University in Europe: Volume 2, Universities in Early Modern Europe (1500-1800)*, ed. Hilde de Ridder-Symoens (Cambridge: Cambridge University Press, 2003): pp. 451-488; Wilhelm Schmidt-Biggemann, “New Structure of Knowledge,” in *ibid.*, pp. 489-530; Roy Porter, “The Scientific Revolution and Universities,” in *ibid.*, pp. 531-562. ロイ・ポーターは、「科学革命は大学の外で起こった」とする科学史における従来までの見解を批判し、カリキュラムの科目名といった表面的な史料からは読み取れない変化が起こっていたことを指摘している。

21 Condorcet, *Rapport et Projet de Décret sur l’Organisation Générale de l’Instruction Publique*, p. 14.

22 Ibid., p. 14. 傍点は筆者による.

23 Ibid., p. 15.

24 Ibid., p. 15.

25 Ibid., p. 15. 傍点は筆者による。

26 この問題を考証的に扱うためには、コンドルセ案の策定にたずさわった人物、とりわけ「五人委員会」のメンバーを中心としたプロソポグラフィ研究が必要であろう。現段階でわかっていることは、「五人委員会」のメンバーは学者が多いということである。コンドルセは科学アカデミーの終身書記であり、ラセペードはジュフォン(1707-1788)の弟子に相当し、『博物誌』(1749-1804)の作成にたずさわっている。アルボガストはストラスブール大学で数学を教えていた幾何学研究者である。彼らの見解がコンドルセ案に反映されていることは疑い得ない。

27 Robert Darnton, *The Business of Enlightenment: A Publishing History of the Encyclopédie, 1775-1800*, (Cambridge: Belknap Press, 1979), pp. 437-454; Robert Darnton, “Epistemological Angst: From Encyclopedism to Advertising,” in *The Structure of Knowledge Classifications of Science and Learning Since the Renaissance*, ed. Frängsmyr Tore, (Berkeley: University of California, 2001): pp. 53-75, on pp. 69-75. なお、『方法的百科全書』の著者の何人かは、公教育委員会のメンバーである。まず、委員会議長のコンドルセは『方法的百科全書』の「数学」の巻を担当した。また、後に公教育委員会メンバーとなるフルクロワ (Fourcroy, 1755-1809) は「医学」の巻を、委員会メンバーだったキャトルメール・ド・カンシー (Quatremère de Quincy, 1755-1849) は「建築」の巻を担当している。Darnton, *The Business of Enlightenment*, pp. 597-609. また、イギリスの百科事典で起こっていた類似の現象については次を参照。Richard Yeo, “Reading Encyclopedias: Science and the Organization of Knowledge in British Dictionaries of Arts and Sciences, 1730-1850,” *Isis* 82 (1991): pp. 24-49.

28 Condorcet, *Rapport et Projet de Décret sur l'Organisation Générale de l'Instruction Publique*, p. 5. なお、本稿ではコンドルセ案の La société nationale des sciences et des arts を隠岐(2011)にならって国立科学技芸協会と訳すことにする。阪上孝はタレーランの L'Institut national もコンドルセの La société nationale も一様に国立学術院と訳している。だが、今日では L'institut de France をフランス学士院と訳するのが通例であること、The Royal Society of London をロンドン王立協会と訳す (Society を協会と訳す) のが通例であること、タレーラン案とコンドルセ案の表現が異なることを鑑みて、国立協会という訳を基本に用いることにする。

- 29 Condorcet, *Rapport et Projet de Décret sur l'Organisation Générale de l'Instruction Publique*, p. 59.
- 30 Ibid., p. 63.
- 31 表に初等学校と中等学校が記載されていないのは、コンドルセ案における四つの学問分類が学院から導入されているからである。
- 32 コンドルセが自然科学の方法を社会にも適用しようと試みていたことは有名である。次を参照：隠岐さや香『科学アカデミーと「有用な科学」——フォントネルの夢からコンドルセのユートピアへ』(名古屋大学出版会, 2011年), 第三部; Keith M. Baker, *Condorcet: From Natural Philosophy to Social Mathematics* (Chicago: University of Chicago Press, 1975).
- 33 Condorcet, *Rapport et Projet de Décret sur l'Organisation Générale de l'Instruction Publique*, pp. 11-12.
- 34 コンドルセをはじめ、公教育委員会がスコットランドの学問をどのように評価していたかについての研究は、稿を改めて論じたい。
- 35 Jean B. Duvergier, *Collection Complète des Lois, Décrets, Ordonnances, Règlements et Avis du Conseil d'État...*, Tome 8 (Paris: A. Guyot et Scribe, 1835): pp. 358-360.
- 36 前掲, コンドルセほか『フランス革命期の公教育論』, p. 396を参照。「われわれはコンドルセとタレイランから国立学術院のプランを借りた」という記述がある。
- 37 Dolby, "Classification of the Sciences: The Nineteenth Century Tradition," pp. 187-189.
- 38 Cf. Julie T. Klein, *Interdisciplinarity: History, Theory, and Practice* (Detroit: Wayne State University Press, 1990).